万葉古代学研究所第１回委託共同研究報告

奈良県における万葉古代学関連研究の史的研究

坂本　信幸

万葉古代学研究所第１回委託共同研究は、近世、近代、現代にわたり輩出してきた奈良県内の万葉古代学に関わる研究者や芸術家の足跡を検証するとともに、古代文化の継承のために奈良県が果たしてきた役割と貢献の様相を解明し、歴史的に総括し、今後の万葉古代学の展開に資することを目的とした研究である。奈良県は『万葉集』の誕生した故郷であり、万葉の故地はその大半を奈良県が占め、奈良県は万葉文化の源泉である。そうした風土を背景として、奈良県は北浦定政、折口信夫、豊田八十代、保田與重郎、奥野健治、等々古代文化・万葉集に興味をもつ研究者や芸術家などを多く輩出してきている。

第１年度は、坂本信幸を中心に資料整備を行うとともに、万葉集研究を全体的に「江戸時代まで」「戦前・戦中」「戦後」の三段階に分けて跡づける中で、「江戸時代まで」と「戦前・戦中」の二段階における万葉古代学に関わる研究者の足跡を検証することとし、万葉古代学研究所において共同研究会を５回開催し、関連する分野の研究協力者も招き、共同研究をおこなった。

その上で、研究の対象と分担について、本年度は、歴史学的観点からの考察として舘野和己を中心に北浦定政の業績を検討するとともに、地理学的観点から出田和久・乾善彦を中心に名所図会その他地誌に見える万葉古代学研究について考察すること、また、橋本雅之・影山尚之を中心に紀行文などにあらわれた大和国についての記述の調査、毛利正守・坂本信幸を中心に江戸期以前の注釈書類に見える大和国に関わる万葉古代学研究の調査、武藤康弘を中心に近世までの大和の民俗研究に関わる調査、垣見修司・井ノ口史を中心に明治期以降昭和初期までの万葉古代学に関わる研究の調査を行うこととした。

第１回の研究会では、明日香村名誉村民として奈良県を中心とした地名研究に功績を残した故犬養孝氏の弟子である甲陽学院高等学校教諭・山内英正氏により、「犬養孝博士と万葉故地研究」という発表がおこなわれた。犬養氏の万葉故地研究が単なる机上の風土研究でなく、また犬養氏個人の実地踏査による研究でもなく、周辺を巻き込んだ実地踏査の実践運動の中で行われてきたこと、高度経済成長期の自然破壊・環境破壊に対する危機感とともにあったことを指摘。有形文化財たる風土景観や地名が損なわれ、無秩序な開発により自然破壊・公害問題などが進み、万葉故地が荒廃しつつある時代背景の中で、名著『万葉の旅』が刊行されていった史的背景について報告があり、飛鳥保存の問題、歴史的景観権の確立の問題、今後の課題などに幅広い視点から質疑応答が交わされた。

第２回の研究会では、本居宣長記念館研究員の吉田悦之氏により「本居宣長の菅笠日記について－飛鳥を行く宣長－」と題する発表が行われた。当時の宣長を取り巻く環境や生活について説明があり、宣長の紀行文である『菅笠日記』を生んだ明和九年（1772）三月五日から十四日にかけての旅の具体的な様相を説明し、その文学的価値と万葉の地名研究についての宣長の意欲について論じた。また、宣長手沢本の『万葉和歌集』の書き込みにおける地名記述のことに触れた。宣長の著述と手沢本との間に何らかの相違があるのかとの坂本の問に対し、意味のある書き込みがあるとの答えがあり、研究会では、手沢本の検討を必要とする旨の意見があり、今後の課題とした。

第３回研究会では、帝塚山大学教授・岩本次郎氏により北浦定政についての「北浦定政と地名研究」

と題する発表発表が行われた。山城国添上郡古市村生まれた定政が、天保三年の父の死後、古市奉行所の印刷方の手代として出仕し、勤めの傍ら和歌、国文学を学び、蒲生君平が著した「山陵志」に触れたことから、山陵の調査を始めることとなり、平城京や条里の研究を進め、文久元年ごろ「平城宮大内裏跡坪割図」を作成、平城宮の規模の解明に功績を残したこと、陵墓の調査修復でも大きな足跡を残したことなど、定政の存在の重要性について再認識させられた。こういった功績がもととなって、明治三十三年（1900）奈良県技師関野貞が、大極殿の跡を明らかにしその保存を訴えることに繋がったこと、また、奈良の植木商棚田嘉十郎が私財を投げうって保存運動に努めたことなど、平城京保存の歴史を知ることができた。

第４回研究会では、『日本書紀纂疏』や『多武峰縁起』の著者である一条兼良と奈良との関係について東京大学教授・神野志隆光氏から報告があった。室町時代の歌人であり連歌作者・和学者でもあった一条兼良は、一条の邸の焼失により息子の尋尊の居住する奈良の大乗院に身を寄せ十年を過ごしている。これは彼の和学に影響を与えたと考えられる。史跡大乗院また、多武峰に関わる人物として重要といえる。発表のあと、毛利正守氏から日本書紀に関わる質問があり、さらに神野志氏から『明日香村史』掲載予定の神野志原稿の内容についての紹介もあり、有意義であった。

第５回研究会議では、井ノ口史委員から万葉の「田村の里」についての諸説の説明があり、豊田八十代『万葉地理考』の説が紹介され、奈良県生まれの歴史学者岸俊男氏『日本古代政治史研究』の説によるべきことが述べられた。

第１年度は、資料整備を中心に行うこととしていたが、経費を利用するにより、村史や町史などを中心として書籍整備を進めることができ、今後の研究環境整備に向けての前進となった。ただ、江戸期においては、奈良県生まれの万葉研究者は、下河辺長流が居るものの、極めて少なく、紀行文などは他の国から大和に訪れた者が書いたものであり、第一級研究資料があまり残っていないことが、調査を進めていく中で判明したのは極めて残念なことであった。品田悦一氏が『万葉の発明』に述べたように、万葉集が日本民族が誇る国民歌集という考えは、古典を明治近代の国民国家の文化装置として成立させていく中で発明されたもので、万葉集の誕生した奈良の地にあっても、近代までは万葉集はそれほど県内の人々に関心を持たれては居なかったように考えられる。

第２年度は、引き続き「戦前・戦中」の段階を跡づけるとともに、「戦後」の万葉古代学に関わる研究者の足跡を中心に研究をすすめた。万葉古代学研究所において、７回の委託研究会議・研究会を開催し、関連する分野の研究協力者も招き、共同研究をおこなった。

研究会の第１回は、歴史地理学の研究者である国際日本文化研究センター教授・千田稔氏による「古代大和の歴史地理研究と万葉集」と題する発表であった。

『万葉集』を史書として真正面から読み解こうとした研究者として岸俊男氏の存在が重要であることを指摘、

大君は　神にしませば　赤駒の　腹這ふ田居を　都と成しつ（巻19・四二六〇）

大君は　神にしませば　水鳥の　すだく水沼を　都と成しつ（巻19・四二六一）

の二首が、従来壬申の乱後の天武の飛鳥浄御原宮であると考えられてきたことに対して、藤原宮のことであるとするなど、飛鳥の地理に明るく、藤原宮発掘調査の指導的立場にあった氏の地形的、地質的知見が、万葉歌の解釈に大きな意味をもったことなどを指摘した。飛鳥の発掘調査では、「赤駒の腹這ふ田居」や「水鳥のすだく水沼」といった景観を連想させるような地形的、地質的な所見が見いだされず、壬申の乱の後、飛鳥に凱旋した大海人皇子の時代には飛鳥はほとんど開拓されていて、湿地を都づくりのために整地しなければならないような状態ではなかったというのである。それに対し、

天武天皇が、生前に中国式の本格的な都城を作ろうとしたのが、大和三山を宮の周囲に配した藤原宮を中心とする藤原京であり、持統天皇によって完成した。その藤原宮の発掘調査に際して、周辺の地名に「フケ」という湿地に関わる地名が多いのに注目し、都づくりの難しかったことを想定して岸氏は藤原宮のことであるという解釈に達した。

また、飛鳥浄御原の所在地については二説があり、一つは飛鳥寺の北で、石神遺跡とよばれる場所、もう一つの説は、「伝飛鳥板蓋宮跡」とよばれている石敷きの遺構の付近であり、出土土器や木簡から後者の地が有力視されつつあったが、そのような状況で岸は、

やすみしし　我が大君の　夕されば　見したまふらし　明け来れば　問ひたまふらし　神岡の山の黄葉を　今日もかも　問ひたまはまし　明日もかも　見したまはまし　その山を　振り放け見つつ　夕されば　あやにかなしみ　明け来れば　うらさび暮らし　荒たへの　衣の袖は　乾る時もなし（巻２・一五九）

の歌をとりあげ、神岡つまり飛鳥の神奈備は、天武の宮殿の南にあって、それを皇后が悲しみにふけってながめている情景だとして、橘寺の南の丘陵の「ミハ山」であるとした説などに触れ、宮の真南に神の山を配するという構図が後の千田氏の地理学研究に大きな示唆となったことを述べた。

また、岸氏がとりあげた

北山に　たなびく雲の　青雲の　星離れ行き　月を離れて（巻２・一六一）

という天武天皇崩御の時の皇后の歌が「北山」とよまれてきたことに対して、原文に「向南山」とあるから、宮の南の山、つまり神岡（ミハ山）ではないかとしたことにも触れ、中国文学の松尾良樹氏の、「向」というのは、唐代の口語で「在」の意味とする論考（「『万葉集』の詞書と唐代口語」『叙説』11号、1986年）により、「向南山」を「在南山」のこととして、宮の南の山ととる自説を紹介した。

また、平成十二年、飛鳥の東の丘陵にある有名な酒船石のすぐ下から発掘された亀形石造物について、この地付近から望まれる多武峰が『日本書紀』の斉明紀に天宮、つまり仙人の住まう宮殿と記されていることから、亀は神仙の世界（和語でいう常世）をささえるという中国の故事に由来するという氏の理解を示し、巻１・五〇の「藤原宮の役民が作る歌」に見える「図負へる　奇しき亀」の叙述が、巨勢道より背に常世（神仙境）の図柄を描いた亀が、新しい時代に現れるという、亀と常世の思想がよみ込まれたものであり、亀形石造物もそのような観点から意味を解釈してよいであろうとされた。

平成十五年に、藤原京の東四坊大路（中ツ道）の東側溝（橿原市出合町付近）から「穂積親王宮」と墨書された木簡が出土したことにも触れ、

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穂積皇子に接ひ、事既に形はれて作らす歌一首

人言を　繁み言痛み　己が世に　いまだ渡らぬ　朝川渡る（巻２・一一六）

と関わって、穂積皇子の宮と高市皇子の宮との関係、そして、但馬皇女が渡った川との位置関係についての推定を述べられた。

さらに、舒明朝から文武朝までを飛鳥王朝として、一つのまとまった時代として捉えようとしている氏の見解を述べ、この王朝の陵墓が八角形であるという特色をもつことなどについて「やすみしし」という枕詞などにも及びつつ論じた。

研究会の第２回は、高松塚の発掘調査で知られる明日香村名誉村民の考古学者関西大学名誉教授・網干善教氏による「『やすみしし』考」と題する発表であった。網干氏は古代学研究における末長雅雄氏の業績について述べられた後、万葉集に二十七首見える「やすみしし」という枕詞の意味につい

ての氏の見解を紹介、「八隅」とは八紘、八荒、八方、八角などと同じく、国土や国家、さらには全世界を表す意味であることを、旧唐書や日本書紀、続日本紀の例をあげながら説明した。また、氏の携わった中尾山古墳の発掘調査の八角形墳丘の実態や、天武・持統陵の八角形陵墓のことに触れ、天皇即位式の時に用いられる紫宸殿の高御座の方壇の上の八角の屋形などとも関連するとの見解を述べた。また、「飛鳥の明日香」という枕詞についての氏の見解について説明した。「やすみしし」の枕詞と八角形古墳との関わりについては、昭和五十四年度（1979）万葉学会での森浩一氏の講演での指摘もあり、また、最近では、国文学者側から橋本達雄氏の「『やすみしし我が大君』考」（『記紀万葉論叢』所収）も出されており、興味深いものであった。

研究会の第３回は、奈良県出身の国語学者である皇學館大学名誉教授・西宮一民氏による「万葉飛鳥の時代」と題する発表であった。西宮氏は、まず飛鳥の範囲を地名に「飛鳥（明日香）」を冠する範囲に限定し、また「飛鳥」の時代を舒明天皇（飛鳥岡本宮）から天武天皇（飛鳥浄御原宮）までの64年間とされ、その上で、１・舒明朝以前の飛鳥、２・舒明皇極朝の飛鳥、３・斉明天武朝の飛鳥に分けて、それぞれの時代における飛鳥の範囲、それにまつわる万葉集の歌について論じた。その中で特に、万葉集巻１・２番歌の難解語「取りよろふ」について、「明日香（都）に付き従う」という新見を提示した。奈良県における万葉古代学関連研究の史的研究を進める上で、基本的な問題の整理ができた点は有意義であったといえる。

研究会の第４回は、中世の歴史学研究者で、奈良県の市町村の歴史研究の第一人者である関西学院大学名誉教授・永島福太郎氏による「鎌倉時代奈良における万葉研究について」と題する発表であった。永島氏の文書調査によれば、春日大社神職・中臣祐定によって寛元年間（1243－1247）に春日本万葉集が、嘉禎年間（1235－1238）に色葉和歌集が、建長年間（1249－1256）に古葉略類聚鈔および楢葉万葉集がそれぞれ書写されたという。奈良において神職が権威を有したのは鎌倉時代だけであり、ちょうどその当時、春日社家を中心として歌道が隆盛を極めて勅撰集奉納なども行われ、その時流の上に中臣祐定・祐春らの万葉研究がなされたというのである。室町期に至ると、仏教界に圧倒されて神職の歌道は低迷するのだという。奥書や花押の実例を示しながらの講話であり、説得力をもつものであった。あわせて吉永登氏による春日本万葉集についての論考自筆書入の寄贈があった。質疑応答においては、氏が長年奈良県の文化財委員を務められ県下各地域の郷土史編纂にも多数関わってこられた経験に基づく有益な話を披露された。

研究会の第５回は、垣見修司委員による「辰巳利文氏の活動について―奈良県における大正期から昭和初期にかけての万葉研究―」と題する発表であった。明治31年、奈良県に生まれた辰巳利文氏は、奈良県の万葉集研究に関わって、多くの役割を果たした。17歳の時に、師事していた佐佐木信綱の竹柏会に入会し、歌人としての活動をはじめるとともに、故郷奈良の文化復興を企図し、雑誌『奈良文化』を主宰、創刊する。雑誌は、沢瀉久孝や武田祐吉ら当時気鋭の国語国文学者を中心として、考古学者、歌人、芸術家など多岐にわたる関連分野の著名人からの寄稿を受け、全国規模の学術雑誌として大正11年から昭和12年までの約15年間で、30号までを発行する。大正から昭和初期にかけての一時期、奈良県を万葉集研究の一大拠点とした、辰巳氏の功績は大きい。

また、辰巳氏は、『大和万葉地理研究』という書を著し、奈良県における万葉地理研究の必要性を説く一方で、当時の万葉故地の風景を『大和万葉古蹟写真』として記録しており、万葉の風土地理研究を確立した犬養孝氏のさきがけになったと言える。

研究会の第６回は、井ノ口史委員による「豊田八十代研究」と題する発表であった。豊田八十代は奈良女子大学の前身である奈良女子高等師範学校の教授であったが、在任中の大正三年、短歌雑誌

『心の花』を主宰していた佐佐木信綱のすすめにより、万葉集に詠まれた地名を地図上に表す「万葉地図」を制作。制作にあたっては『万葉集古義　名所考』に挙げる地名を参照しつつも、奈良在住の利を活かして実地踏査を重視、その成果は、『心の花』19巻3号（大正4年）の巻頭を飾った。さらなる地名研究の必要性を感じた豊田は、『大和志』や『大日本地名辞書』などの先行資料を参照しつつ、独自の見解を『万葉地理考』（昭和7年）で披瀝するに至る。また、昭和7年10月に開園した春日大社万葉植物園の創設にも佐佐木とともに関わり、園内参観の手引きにもなり得るように『万葉植物考』（昭和6年）を執筆、印税はすべて植物園に寄付することにしたという豊田の業績を紹介。また、豊田にはほかに『万葉集新釈』（大正5年）などの著作があるが、いずれも奈良県という環境に触発され、そこでの経験を骨子としていること、それらの著作は、県外に住む人々が奈良という土地への理解を深めるための、大きな役割を果たしたといえるという、近代における万葉地理研究に果たした豊田八十代の意義を、その足跡をたどり評価したものであった。辰巳利文との関係も知られ、昭和初期における万葉研究の実態を明らかにするために重要である。昭和初期の万葉研究における奈良県研究者の果たした意義が、これらの研究によってよく分かる。

本年度の研究会では、はからずも千田・網干・西宮の三氏の発表が、「やすみしし我が大君」と「飛ぶ鳥の明日香」という、枕詞にかかわるものとなっており、それぞれの領域からの見解が述べられたのは興味深いものであった。また、垣見・井ノ口両委員の発表では、大正から昭和初期にかけての奈良県内の万葉研究の実態が明らかにされ、この期の万葉研究は奈良の地を中心におこなわれており、県内の研究者が全国の万葉研究の牽引車であったことが知られ、また、辰巳利文と豊田八十代との研究上の関係も知られ、今後の県内万葉古代学研究者の足跡を辿る第一歩として意義のあるものであった。